

石川県白山自然保護センター編集

はくさん

特集 白山の鳥類

第10巻 第1号



イワヒバリ

夏に白山へ登ると、頂上付近の岩場やその周辺のお花畑でよく姿を見ることのできる鳥です。全身褐色や灰色が目立たない色をしています。人をあまり恐れることなく、すぐ近くまで寄って来るので観察しやすい鳥です。

この鳥は、日本ではライチョウと並んで高山を代表する鳥です。海外にもヨーロッパからアジアにかけての高山に点々と分布しています。

6～8月頃に、山頂付近の岩場の岩の裂け目などに、枯草や根などを敷いて巣をつくり、青色の卵を3～4個産みます。餌は主に昆虫で、お花畑や雪渓の上で、巣立った幼鳥が親鳥から餌を受け取っているのを見ることがあります。冬期は少し低い山地へ移動して、小群で生活するといわれていますが、白山ではまだ観察されていません。

白山でのこの鳥の分布と数について、今年から始まった高山帯の自然史調査の1つとして取り上げて調査を行なっていく予定です。

(上馬康生、写真：橘映州氏提供)

白山の鳥たち

中村正博



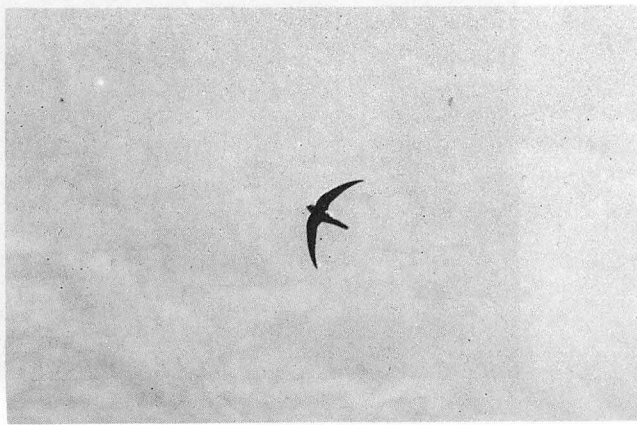
アオモリトドマツの実を好む ホシガラス (橘映州氏提供)

高山では

夏、山頂池めぐりコース
を散歩するとよく見聞きす
る鳥たち



ルリビタキチヨロチヨロリと鳴く ルリビタキ (♀)



鎌のような翼で風を切る アマツバメ



頬を染めて口笛を吹く ウソ (♂)



虫のように鳴く地味な色あいの カヤクグリ



長い尾を上下に振るスマートな キセキレイ (♂)



野猿広場で猿の餌を失敬する カケス

山麓では

春～夏にかけてスーパー
林道沿いや中宮の白山自然
保護センター周辺でよくみ
かける鳥たち



飛ばば翼の白斑が目立つ ブッポウソウ



全身真赤な アカショウビン



一筆啓上と鳴く ホオジロ (♂)



森の鳴い手 キビタキ (♂)

環境別にみた白山の鳥類

上馬康生

今まで白山地域では、約 140 種の鳥が記録されています。しかしこんなに多くの鳥に、いつ、どこへ行っても出会えるわけではありません。鳥の中には、一年中同じ地域に棲んでいる種類もありますが、大部分のものは季節が変わると移動します。より棲みやすい気候や餌の豊富なところへ飛んでいくのです。またそれぞれの鳥には、好みの環境があります。ブナ林などの広葉樹林にいるもの、亜高山帯の針葉樹林を好むもの、川沿いにだけいるものなどです。ではこれから、白山の様々な環境ごとにどのような鳥が棲んでいるかを、主に春から夏の繁殖期を中心としてみていくことにしましょう。

高山帯

白山では山頂から標高 2400 m 付近までが高山帯です。ここでは背の高い木は育たず、ハイマツやウラジロナナカマドなどの低木林や、夏には数多くの高山植物が咲くお花畑が広がっています。ハイマツ林では特にカヤクグリが多く観察されます。赤褐色の目立ちにくい色をしています。枝の上でチリリリ、チリリリと細く美しい声でさえざっていることが多く、よく目につきます。ハイマツなどの枝上に細い枝やコケなどを用いて巣をつくります。またハイマツ林の近くの登山道などに、ハイマツの松ぼっくりの小片がたくさん散らばっていることがよくあります。これはホシガラスが 1 か所に集めて食い散らかした後です。ホシガラスは早春の 3 月下旬～4 月頃に、主に亜高山帯の針葉樹林で巣造りをするといわれていますが、まだ詳しいことはわかっていません。中宮道の 1300 m 付近で、3 月下旬に巣材を運んでいるところが観察されています。おそらく、ブナ帯上部のクロベヒメコマツ林などでも営巣しているものと思われる。そのホシガラスは夏には白山の高山帯へ、ハイマツの実を求めてやってくるの

です。この他にハイマツ林周辺には、ルリビタキやウソなども見かけることがあります。

次に白山の頂上付近には、岩場や大小の岩がごろごろしている所がありますが、ここでは登山者をあまり恐れないイワヒバリを、すぐ近くで見かけることがよくあります。この付近の岩場で、今までに何度か営巣が確認されています。

他に白山の高山帯で営巣が見つかった鳥には、ビンズイ、キセキレイがあります。ビンズイはお花畑などの、地上の草の根元やくぼみに巣をつくります。またキセキレイは、本来は山地帯以下の川沿いによく見かける鳥ですが、室堂周辺の水場や雪渓にも時々現われ、室堂の建物に巣をつくり、雛をかえしたことがあります。この他高山帯の上空にはアマツバメやイワツバメが舞い、時にはイヌワシやチョウゲンボウ、トビなどのワシタカ類が現われます。この他にも亜高山帯以下で繁殖している鳥が、時々上ってきます。

亜高山帯

ダケカンバやアオモリトドマツの林で代表される、標高 1600 m 前後から 2400 m 付近までが白山では亜高山帯です。登山をしていて、亜高山帯へ入ったことを知らせてくれる鳥がいます。メボソムシクイという鳥で、ウグイスの仲間で体は地味な草色をしています。高くよくひびく声でチョリ・チョリ・チョリ・チョリと鳴きます。ダケカンバ林の樹冠部を主な生活場所としています。白山の最もポピュラーな砂防新道を行くと、中飯場を過ぎて少し登った標高 1600 m 付近からその声をよく聞くことができます。メボソムシクイと並んで亜高山帯に多い鳥はルリビタキやカヤクグリです。ルリビタキは雄の背が青色の美しい鳥ですが、林の中の低木層の繁みにいることが多く、姿を見つけることは困難です。この鳥は冬になると平地へ降りて来て、公園

や庭で見かけることがあります。ウソも亜高山帯の林に特有の鳥で、鳴き声はフィー・フィーと口笛を吹くような声で、鳴きまねをするとすぐ近くまで寄って来ます。この鳥も冬には平地まで降りて来ます。花のつぼみが好物なため、果樹園や公園に被害が出ることがあります。昭和56年の冬に大群で現われたため、春の花見にサクラの花が少なかった金沢の兼六園の話は有名です。

ホシガラス、ビンズイ、アマツバメなどは高山帯でも見られますが、むしろ亜高山帯に多い鳥です。また、ミソサザイ、ウグイス、ヒガラ、クロジ、コマドリなどは亜高山帯から、その下の山地帯にも見られる鳥です。この中でミソサザイやウグイスは分布の広い鳥で、ミソサザイはよく繁った林の中の、谷間の小さな流れがあるような所に、ウグイスは林の縁の低木林や笹やぶの広がる明るいところにすんでいます。特にウグイスは、やぶがあれば低山から高山帯にまで広い分布をもっています。一方、クロジやコマドリは分布の限られている鳥です。共に亜高山帯の下部から山地帯の上部の比較的せまい範囲で声を聞くことができるだけです。この他に亜高山帯に特有な鳥にキクイタダキやサメビタキがありますが、どちらも白山では数は少ないようです。これらの鳥は針葉樹林にすんでいるのですが、白山にはアオモリトドマツの林、それも高木林があまり多くないことが、あまり見られない原因のように思われます。

山地帯

山麓から標高1600m付近までの範囲で、白山では最も広い面積を占めているところですが、本来は多くがブナ林であったのですが、今では二次林や植林地などに変わっているところが多い。それでも人の入り難い奥地や標高1000m前後より上方には、まだブナ林がよく繁っています。白山のブナ林に多い鳥は、シジュウカラ、ヒガラ、コルリ、キビタキなどです。シジュウカラは平地の公園から山地帯まで、いろいろな林に広くすんでいます。特によく繁ったブナ林には多い鳥です。林の中層から下層に多くみられ、樹洞などに営巢

ブナ林の鳥類構成

(6月)

種名	個体数(%)
コルリ	16 (18.2)
シジュウカラ	13 (14.8)
ゴジュウカラ	9 (10.2)
キビタキ	8 (9.1)
コガラ	8 (9.1)
クロジ	6 (6.8)
ミソサザイ	6 (6.8)
ヒガラ	5 (5.7)
カケス	3 (3.4)
ウグイス	3 (3.4)
アカゲラ	2 (2.3)
ウソ	2 (2.3)
ヤマガラ	2 (2.3)
マミジロ	1 (1.2)
ヤブサメ	1 (1.2)
オオルリ	1 (1.2)
アオゲラ	1 (1.2)
ツツドリ	1 (1.2)
計(18種)	88

(11月)

種名	個体数(%)
マヒワ	10 (33.3)
ツグミ	5 (16.7)
ゴジュウカラ	4 (13.3)
ヒガラ	2 (6.7)
コゲラ	2 (6.7)
ミソサザイ	1 (3.3)
エナガ	1 (3.3)
カケス	1 (3.3)
シジュウカラ	1 (3.3)
コガラ	1 (3.3)
ホシガラス	1 (3.3)
ウソ	1 (3.3)
計(12種)	30

します。一方ヒガラは山地帯から亜高山帯にかけてすんでおり、林の上層の樹冠部を主な生活場所としています。シジュウカラやヒガラは、繁殖期が終わると異なる種類どうして群をつくって生活するようになります。群にはコガラやヤマガラ、ゴジュウカラなども入ります。このような群れをカラ類の混群とよび、夏の終わりから冬にかけての林の鳥の主役となります。コルリは、比較的明るい林の、低木層の繁みのあるところにすんでいます。一方キビタキは深い林の中の、低木層が少なく、空間の多いところにすんでいます。この他ブナ林には、ヤマドリ、カケス、アカゲラ、マミジロ、ジュウイチなどがすんでおり、他の林に比べて最も種類の多い林といえます。

ところで春から夏には、多くの鳥でにぎわうブナ林も秋になると一変します。表は、白山のチブ利尾根のブナ林(標高960m~1650m)の6月22日及び11月24日の、日の出後2時間余りの個体数調査結果を比較したものです。秋になると種類数、個体数共に少なくなっており、内容も異なっていることがわかります。コルリやキビタキは暖かい東南アジア方面へ渡って行き、逆にシベリアから渡ってきたマヒワやツグミがみられるようになります。

今までブナ林の鳥を中心にみてきました

が、同じ山地帯の下方はコナラやミズナラ林、スギ植林地が広がっています。そこにはヒヨドリやカケス、ヤブサメ、メジロなどが多くすんでいます。また伐採後地や、林道沿いの低木林や草原には、ホオジロやウグイスが非常に多くみられます。

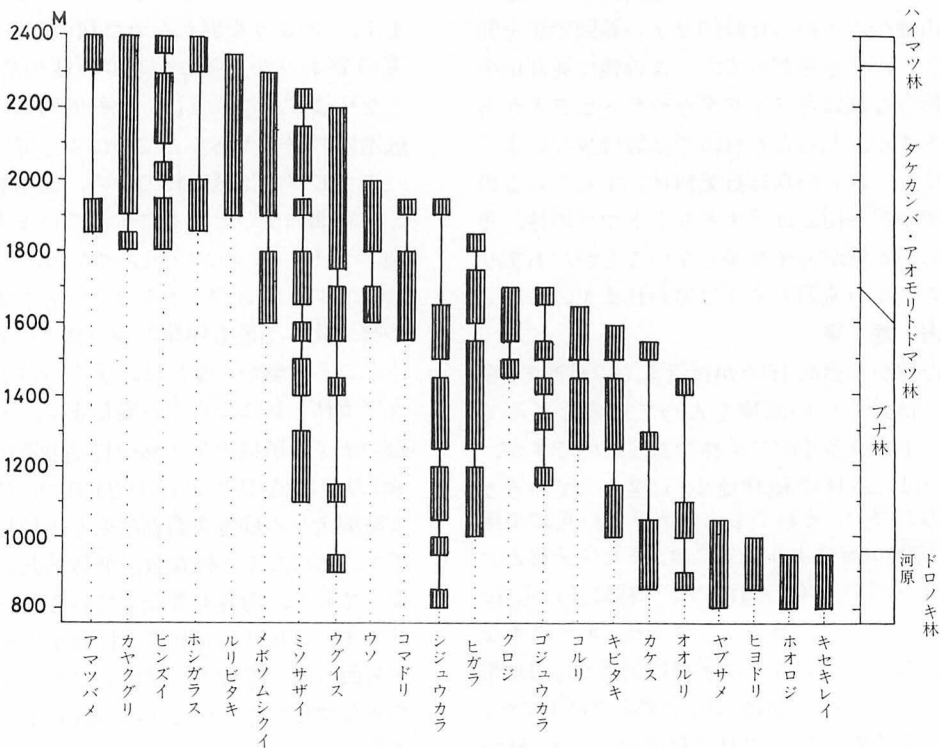
山間部

本来は山地帯の一部といえますが、白山では手取川が山地に深く谷をきざみ、流域に集落や耕作地が広がって特徴的な景観をつくっていますので、その人間生活にかかわりの深い谷あいをも山間部として区別しました。河川沿いには、キセキレイが多く、カワガラスやオオルリも一般的な鳥です。カワガラスは流れとは切り離せない鳥で、溪流沿いにかなり上流部にまで分布しており、水に潜って水生昆虫などを餌に取っています。オオルリは川沿いの林の、木の頂や枝先などの比較的に見つけやすいところでよくさえずっています。また数は少ないですが、ヤマセミやアカシヨウビン、ブッポウソウなども谷あいにすん

でいます。一方集落や水田付近には、スズメ、ツバメ、ハシボソガラスなどがみられます。これらの鳥は人家に巣をつくったり、捨てられたゴミを餌とするなど、人間生活と深く結びついており、人家が無くなるといなくなります。他にキジバト、トビ、ヒヨドリ、ウグイス、ホオジロなどもこの地域に一般的な鳥です。

垂直分布

今まで、白山の山頂から山麓にかけてすんでいる鳥を環境別にみてきましたが、鳥の中にはある林に限ってすんでいるものがある一方で、林を特に選ばずに幅広く分布しているものがありました。また同じ林の中でも、細かな植生のちがいや、流れのあるなし、地形などに左右されて細かな分布をしています。図は白山の登山口の市ノ瀬からチブリ尾根を登って別山山頂までの、夏期（6～7月）の代表的な鳥の垂直分布を示したものです。それぞれの鳥の分布範囲と、環境の概要がおわかりいただけると思います。〈研究普及課〉



白山，別山～市ノ瀬道の繁殖期鳥類垂直分布

クロジの営巣 —白山山系での初の繁殖確認—

池田善英*・上馬康生**

白山麓に夏が訪れる6月頃、センターのある蛇谷周辺では、ウグイス、オオルリ、キビタキ、クロツグミなどの歌手たちの囀りが、毎日谷間に響いています。しかし、これらの小鳥たちは、のんびりと歌ってばかりいるわけにはいかないのです。なぜなら、高山の短い夏の間、繁殖という大事な仕事を無事に終えなければならないからです。

これらの小鳥たちのコーラスの中に「ホーイ、チヨチヨ」という鳴声が混っているかもしれません。クロジの囀りです。このクロジの繁殖が去年の夏に白山山系では初めて確認されました。

クロジのプロフィール

クロジ *Emberiza variabilis* は、ホオジロの仲間、全長が約17cmあり、スズメより少し大きな鳥です。名前の通り雄は全身暗灰色で足の淡褐色が目立ちます。また、他のホオジロ類と違い、外側の尾羽に白いところがないことが特徴です。

カムチャツカ半島南部、サハリン、千島列島、日本で繁殖して、北の地方のものは冬になるとやや南へ移動します。全国で見られますが、北海道では夏鳥、本州北部では漂鳥(日本国内のような狭い地域において季節的移動をする鳥)または冬鳥、本州南部以南では冬鳥となっています。

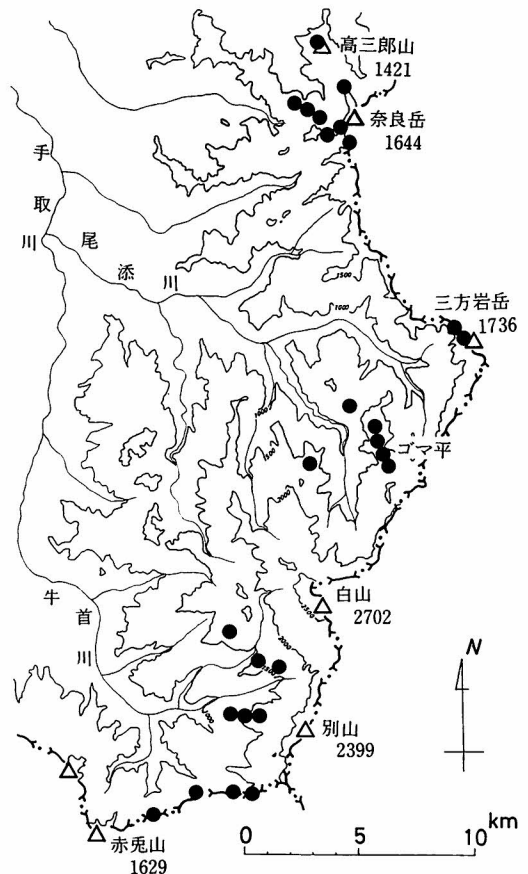
夏期は北海道、本州北部の亜高山帯下部から山地帯上部にかけての、ササや他の低木がよく発達した針葉樹と落葉樹の混交林や落葉広葉樹の疎林などに生息しています。冬期は温暖な地方の低山帯や丘陵地などのよく繁った暗い林に棲みます。下生えの藪の中の地上で草の種子などをあさり、明るい所にはめったに出ないのであまり目につきません。

学名の *variabilis* というのは「変化のある」という意味のラテン語で、クロジの大き

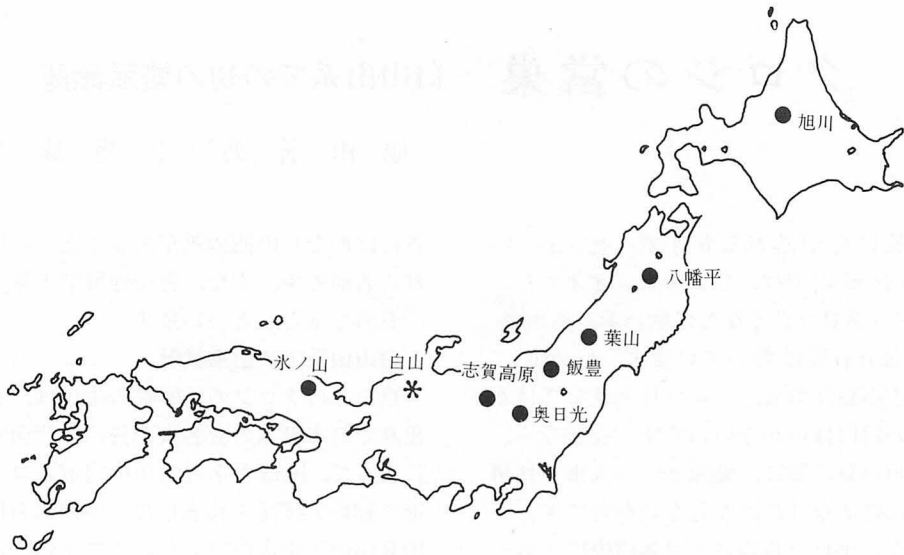
さにはかなりの個体差があることから付けられた名前です。また、白山地域での地方名は「あおしとど」といいます。

白山山系での生息状況

白山でのクロジの繁殖期の生息は、石川県出身で日本野鳥の会名誉会長の中西悟堂氏らによって、1955年7月白山中宮道のゴマ平付近で初めて確認されました。中西氏らは、白山登山の下山途中でした。ゴマ平付近に来た時に「ホーイ、チヨチヨ」という鳴声が、かなり広い範囲にわたって多く聞かれました。



図一 県内におけるクロジ確認場所(繁殖期)



図一 2 日本におけるクロジの繁殖確認地

しかし、その時には何の鳴声か判りませんでした。テープに録音されたその鳴声を、下山後、金沢の松田衛氏（現在、日本野鳥の会石川支部長）が聞かれて、クロジの鳴声であることが判りました。

当時、クロジは秋に北方から本州に渡って来る冬鳥とされていました。また、繁殖期の生息確認は、大雪山、北アルプス、志賀高原、八甲田山等において少数例があるだけで、白山のように多数いるところは知られていませんでした。このため、白山は日本でも有数の繁殖地であるとされました。

現在では、図一 1 のように、北は犀川上流の高三郎山から、南は福井県境の赤兎山周辺までの地域で繁殖期の生息が確認されています。このように広い範囲に分布し、個体数はそれほど多くはありませんが、白山山系で繁殖していることは間違いないと考えられました。しかし、1955 年以来長い間、繁殖の確認はなされていませんでした。

白山山系での繁殖確認

これまでにクロジの繁殖が確認された地域は、図一 2 のように旭川市、八幡平、山形県葉山、飯豊連峰、奥日光、志賀高原、兵庫県氷ノ山だけでした。白山山系では、去年(1981年) 7月に三方岩岳で初めて繁殖が確認されました。

去年は 56 豪雪のため山にも雪が遅くまで残り、白山スーパー林道が開通したのは、例年よりひと月半以上遅れて 7 月にはいつからでした。スーパー林道の石川・岐阜県境から歩いて約 30 分のところにある三方岩岳（標高 1,736 m）付近では、毎年クロジの囀りが聞かれます。この年、ここでクロジの囀りを初めて聞いた 6 月 24 日には、登山道はかなり雪に被われていて、コメツガの大木が道に倒れていました。

7 月 18 日に再び三方岩岳を訪れた時には、登山道の雪はすっかり消え、クロジの囀りがあちこちで聞かれました。ピークをあとにして、下山を始めて少し下ったところの登山道の脇で、クロジのメスが逃げずに擬傷行動(巢



写真一 1 クロジの巣と卵

の卵やヒナに外敵が近づいた時に、親が傷ついたふりをして外敵の注意を自分に引きつけて、外敵を誘導して危険を回避する行動)をしていました。周辺を探すと、登山道のすぐ横のマルバマンサクの枝に巣が見つかり、卵が4個ありました(写真-1)。

巣は標高1,600 m位の綾線につくられた登山道の脇にあり、周辺の植生は高木層(15 m位)にブナ、ダケカンバ、コメツガ、クロベなどが混った、ブナ帯からダケカンバ帯への移行地帯で、低木層(3 m以下)にはブナ、ナナカマド、マルバマンサク、オオカメノキ、チシマザサ等がよく茂っていました。

巣は地上高52 cmの位置のマルバマンサクの枝に掛けられていました。巣の大きさは、外側の深さ105 mm、直径145 mm×130 mm、内側の深さ54 mm、直径70 mm×65 mmでした。卵は少し青味のある非常に薄い茶色の地に、濃茶色の斑点及び曲線状のすじがありました。大きさは4個平均して、長径23.0 mm、短径16.8 mmでした。

7月24日には、巣に変化はなく卵は4個ともありました。親鳥は人が巣から4 m位まで近づくと必ず逃げ、小声で「チツ、チツ」と鳴きながら巣の近くの繁みの中から巣をうかがっている様子でした。この頃になると、夏休みにはいったこともあって、多くの人が三方岩岳を訪れるようになりました。巣は注意すれば登山道から見える所にあります。また、親鳥は人が通るたびに巣から離れるため、卵が冷えてしまってかえらないかもしれません。雛がかえた後では、雛が親鳥に餌をねだる声のために登山道を歩く人に気付かれて、心無い人によって持ち去られはしないかと心配しました。

7月27日には、すでに雛が4羽巣に座っていました。雛には濃灰茶色の羽毛が生えていました。心配していた雛の鳴声は、親鳥が人の気配を感じて巣から飛び去ってしまうと全く聞かれませんでした。途中で繁殖が失敗しないようにと祈りながら、ほぼ毎日雛の様子を見守りつづけました(写真-2)。

8月3日に巣を見にいったのは午前11時



写真-2 クロジの雛

46分でした。この時は巣に雛は居なくて、巣には真新しい糞が一つ落ちていました。前日には4羽とも巣にいたことから、この日の午前中に巣立ったものと思われます。よく注意してみると、巣から4~5 m奥の繁みの中で、甘えた感じの細かい声が聞えました。おそらく、巣立ち雛の声でしょう。声は散らばって聞えました。その声の辺りには、巣立ち雛の姿は発見できませんでしたが、オスの親鳥がその声の辺りに見えました。

巣立った後の巣の材料を調べてみると、外側はコメツガ、ヒメヤシャブシ、アクシバ、ミヤマシグレ、アオモリトドマツの小枝とイネ科の草本の葉から出来ていて、内側はマルバマンサク、ミズナラ、ハウチワカエデなどの葉や根から出来ていました。産座にはリゾモルファ(菌類の菌糸組織からなる糸状構造)が敷かれていました。

クロジと環境

先の図-1を見てもらうと判るように、クロジは白山山系に広く点状に分布していますが、その生息環境は極めて限られています。つまり、今回の巣もそうであったように、ブナ帯上部からダケカンバ・アオモリトドマツ林にかけての、ササや低木がよく繁った疎林にのみ生息しています。繁殖期の標高は約1400 mから1750 mの範囲に限られています。

このように、生息環境が特定の植生地域に限られ、個体数もあまり多くないことから、環境の変化によって大きな影響を受けると思われ、保護の必要のある鳥の一つといえるでしょう。

〈*金沢大学理学部、**研究普及課〉

—白山探鳥記— 秋の中宮道を行く

柴田文子

鳥を観察する目的で白山を歩いたのは20数回。どの山行も大変楽しく、私を見に出てきてくれた(隠れてソッと見ているのもいた)鳥たちに、感謝するばかり。

白山の尾根道は危険な箇所は少なく、「鳥、鳥」と思ってキョロキョロしながら歩くのもってこいだし、はるかに望むアルプス、豊かな森、夏ならば花の海、生き活きとした動物たち、すべてが私の心を魅了してやまない。

中でも印象深いのは、1980年秋、中宮道を歩いた時のこと。

……眠りから覚めない室堂を後に、霜柱をサクサク踏み、大汝に向って歩きながら、自分の足音なのに「他の人も来るのかしら」と立ち止まるのが何度か。

東南の空は暁、西南には名残りの星がまたたいて「ガンバレ、ガンバレ」と言っているよう。時折、ひそやかにさえずるカヤクグリの声。短い高山の夏の間生まれたヒナたちが、すっかり成長して親鳥と共にもう歌っているのだろうか。

岩間道との分岐点を過ぎた道端に、毛槍を振立てているチングルマは、いにしえに艱難辛苦をのりこえてこの峰に立った行者さんをも、年々繰返すイワヒバリの誕生のドラマをも、見てきたことだろう。

冠雪を頂いた槍と穂高、どっしりした乗鞍、白煙を上げる御岳(少し前に爆発があったばかり)、生れ故郷を後に隠す恵那の山脈、どれも今日の山行の友達に思える。

ヒルバオ雪溪で、朝日を拝みながら朝食を食べていると、ハイマツ帯にシジュウカラの小群が遊んでいるのが見える。

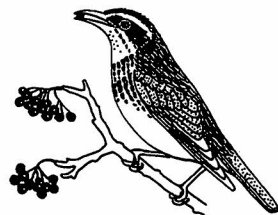
賑いの褪せたお花松原、北弥陀ヶ原。葉がちぢれて枯れたナナカマドに、紅の実だけは陽を浴びて鮮かだ。その一つの枝にツグミが1羽。「おまえはまずこんな高い所へ渡って来

るのだね。ナナカマドの実はおいしいかい。渋く可愛い鳥よ、受難の歴史をもつ鳥よ。例年だともう少し遅くに町中で逢うのに、今秋はこんなに早くこんなにいい所で逢えたね」と心がホカホカ。

時節を過ぎひっそりとした鶯平を歩いていると「ここを歩いているのはホントの私かしら。夢ではないかしら」と頬をつねりたくなる。思いたってから、残してくる家族のための食事の下ごしらえ、天気図とのニラメッコ、山の道具の準備、諸々の浮世の義理をなんとか片付けて、山道を歩くことは幸福の極みだけれど、まだ2日目では実感が湧かない。3日目あたりから「イヒヒ…、イヒヒ…」と笑いがこみあげてきたりする。

灌木の枝で名残りの歌をうたっているメボソムシクイの、背の羽毛がひときわ緑に見えるのは、バックが紅葉しているからだ。この「ゼントリ、ゼントリ」とさえずる小さな鳥は、春夏には樹々の深緑に負けて、茶色っぽく見えたりするけれど。

藪で「ガッ、ガッ」と警戒の声を出したのはルリビタキ。夏、標高2,000m以上の岩陰の藪で「ルリビタキ チョロチョロリ」と美しい笛声で、自己紹介の歌を繰返すけれど、子育ての姿を見つけるのはかなりむずかしい。今は秋だから間近かに雌雄を見、まだ耳に残っている彼の歌を頭の中で反唱しながら、人里近くでの冬越しの無事を祈る。



日が高く昇り、空腹をおぼえたので、涼しい所まで急ぎ木陰で腰を下す。紅、橙、黄、うす緑、からし色、茶色、そしてそれらを混ぜ合わせ、またかげりをつけた種々の色に染め上げられた山々をおかずに、澄みきった風をお茶がわりにして食べるお弁当は、どんなに粗末でも、これからの道程を歩くのに充分のエネルギーとなってくれる。

白大島紬の布地に似て木肌が美しいブナの幹、その幹の重なるの向うにすかして見える岩間道のなだらかな尾根。うっすら黄葉し、渡る風にさやさやと鳴るブナの樹冠、その葉の重なりのはるかに広がる碧い空。ため息をつきながら歩を進めて行くと、腰の白いオオアカゲラが「キョ、キョ」と鳴いて木々を打診している。「森を虫害から守ってくれて御苦労さん」。

コガラ、ヒガラ、シジュウカラの混群にも出会う。小さく身の軽いこれらの鳥は、まだ青葉を残す高木や、錦に色づいた若木の、小枝の先から葉の先へと活発に動き、時には地上にも下りて、私の目にはどこにあるのかわからない餌を捜し出して、パクパク食べる。

「プイプイプイ」と鳴いて、幹を逆さに降りるゴジュウカラの青灰色の背も、淡いオレンジの腹も、夏より鮮かに見えるのは、斜めに射す秋の陽で森が金色になったからだろう。

クマよけの鈴を鳴らすのも忘れがちに、念仏尾根との分岐点に着き、右手に向かって「いつかこの道をも歩けますように、ナンマイダ」。

ゴマ平小屋を覗いてみると、つわ者どもの夢の跡といった風に、種々雑多なゴミが散らかっているの、水だけ補給してシナノ木小屋へ向う。いよいよこれからがホントの中宮道だ。

「ガーガー」と呼ばれては「はて、ホシガラスだったかなあ、それともカケスかな」と立ち止って、次の声を確かめるまで歩き出せないこともある。この年は冷夏でハイマツの実が不作だった為か、これを主食としているホシガラスの観察数が例年より少ないのを気にしていたから。



風が止み葉ずれの音がとだえた時には、姿は見えないけれど「ニーン」と甘えたアトリの声や、「ジュイーン」「ジュイーン」と呼び交すマヒワの声も聞える。

シナノ木小屋にたどり着いて中を見ると、ゴマの小屋以上のゴミの山!!「山男、心して小屋を使いたまえ」とにもかくにも、ここを一夜の宿と決めたからには、まずゴミを片付け眠るスペースを確保して、食事は外の方が精神衛生上好ましいと考え、笈のよく見える所で夕のお弁当を開く。食べ終らないうちに、後の藪がザワザワザワ。私の心もザワザワザワ。「何だろう、クマさんならあっちへ行っとくれ」祈るような気持ちであたりを見廻すと、木の枝が数か所でユッサユッサ揺れて「ブー、キッ」と変な声。双眼鏡で見ると保護色の毛に包まれたニホンザルだった。あっちにも、こっちにも、いろんな顔、いろんな大きさのが合わせて30数頭。身体が大きく威厳のある1頭は、尾根道の高い所に座って、私が顔を見ると目をそらし、「おまえなんかには用はないぞ」といった表情をしている。少し小さめで若者らしいのは、遠慮なしに人の顔をジロジロ見ながらお尻を掻いたりしておかしい。彼らの種々な声をノートに書きとめているうちに、暮れなずむ山の空も、ようやく墨色になってきたので小屋に引き返す。ニホンザルの群も近くで夜を過す気配だ。

シュラーフの中で静かにしていると、小さな（暗くて姿は見えないけれど、走り廻る足

音から推察すると) ネズミが誰かの残して行ったお米をポリポリ食べている。可愛いものにリンゴを供えておく。ところがチュー子大明神のお口に合わないのか、翌朝みるとそのままだ。

朝焼けに片頬を染めている筈に見守られて出発。昨夕のニホンザルの群は、まだそこいらで山ブドウの実や葉を食べたり、私を珍らしそうに見ながら登山道を右往左往して賑かなので、一番気に入っている「ホホーッホホ」という声をまねながら、道を開けて通してもらおう。彼らの残した山ブドウの実を食べると、キューンと酔っぱい味が口いっぱい広がる。乳頭の色づいた個体の近くを通る時には「赤ちゃんはいないかしら」と藪に注意するが、黒っぽいチビは見つけられない。

今日は雲が広がり、見上げててもクラクラする日射しがないので、幾度も猛禽の姿を求めて空を仰ぐのだが、黒く大きなイヌワシも、白黒に染め別けられたその若鳥も、私の見えない所で活躍しているのだろうか。イヌワシはニホンザルを襲うことがあるそうだから、当然ニホンザルはイヌワシを識別できるだろう。おサルさんは他には何鳥を知っているかしら。彼らと頬の色が同じウソ、背の色が同じウグイス、声まねの上手なカケス等を琥珀色の瞳で見つけた時、山に生きる仲間として、内心ニヤリとするのではないだろうか。

大きな木が伐られてしまった湯谷頭では、クロジがか細く「ツ、ツ」と地鳴きして、藪の中の地上で餌を捜し、マミチャジナイは「シーッ」と警戒の声を出しながら木の実を食べている。残念なことに私は植物オンチなので実の名はわからない。

旅鳥であるエゾビタキ・サメビタキらはシックな羽色ながら、可愛い瞳をいっばいに開いて、飛んでいる虫を空中でヒラリと捕らえ、また元の枝に止まる動作を繰り返して、見る者を飽きさせない。

右も左も「クワバラ、クワバラ」の輪珠坂を過ぎるあたりから、時雨がサラサラと降り出す。濡れながらも一心にフライングキャッ

チを繰り返すコサメビタキにさよならをして、私も濡れながら、一步一步ゆっくりと清浄坂を下る。

中宮温泉で汗を流していると、浴場の窓から、イワツバメがヒラリヒラリと飛び交うのが見える。北の国から渡ってきたものがこの蛇谷を通過中なのか、それとも白山地域で夏を過したものが旅発ちに備えて、脂肪を蓄えるためにせっせと餌を取っているのか。

ザックの底につめてきたピンクの服に着替えて白山自然保護センターへ向う。途中の川岸の岩壁に、優しくゆらめいている白い花はイワギクだとセンターで教わる。

人っ子一人に出合わなかった昨日と今日の山行を懐かしみ振返っても、もう山々は煙る小雨に包まれて、その姿は水底の岩のように定かではない。

V字溪谷に添って走るバスに揺られながら、村落を一つまた一つと通り過ぎる毎に、だんだん浮世の人間に変身し、ようやく息子の顔が浮かんでくる。こんどは彼に荷を背負ってもらって歩きたい。

.....

その懐に多くの命をはぐくんでいる豊かな『山』に接する時、自分が自然(生態系)の一員であることをしみじみ理解できるものだ。"デイスカヴァ ホモ・サピエンス"に役立つフィールドとしての白山が、永遠にその価値を保ち続けるようにと、そこに生きる我が友(鳥)と共に切に願う。



<日本野鳥の会石川支部>

白山地域鳥類目録

目録作りにおいて、まず白山地域をどの範囲とするかで当然のことながら内容がちがってきます。ここでは、石川県内の鶴来町、河内村、鳥越村、吉野谷村、尾口村、白峰村の全域を白山地域としました。また近年(1960年以後)の観察記録のあるものに限って目録としました。合計40科139種となります。なお今までに白山の鳥類目録として発表されているものの中で、この目録にない鳥が報告されているものがあります。それは岐阜県側や金沢市の犀川上流の記録や、昔のカシミ網による捕獲例などで記録の明確でないもので、ヒクイナ、バン、アオシギ、コミミズク、アリスイ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、ベニヒワ、アカマシコ、イスカ、ニュウナイスズメがあります。また白山山系北部にあたる、金沢市の犀川上流の高三郎山周辺で筆者が確認したものに、ホシハジロ、カワアイサ、トラフズク、ミヤマホオジロ、オオマシコがあります。

なおこの目録は、白山地域自然環境調査報告書(1981, 石川県環境部発行)に載せたものに加え、追加修正をしたものです。

観察頻度により、***多い, **普通, *少ない又は稀の区別をし、()は非繁殖期のみ記録されたことを示します。また稀な記録と筆者以外の記録は備考に記入しました。観察者は茨木友男(中宮在住)、永井竹男(白峰在住)、永弘健二、池田善英、柴田文子、加藤晃樹、中村正博(以上日本野鳥の会会員)の各氏です。また引用文献は次の2つです。(上馬)

熊野正雄・木村久吉(1970) 白山の鳥類, 白山の自然, 231-275, 石川県園部浩一郎(1976) 白山の動物相調査, 鳥類, 早稲田生物No. 18, 26-35

科名	種名	高山帯	亜高山帯	山地帯	山間部	平野部	備考
カイツブリ科	カイツブリ				(*)		1970年頃、中宮(茨木)
ミズナギドリ科	オオミズナギドリ				(*)		{1973. 11. 29 市ノ瀬(永井)、 1976. 11. 6 一里野(茨木)、 1980. 10. 28 市ノ瀬(永井)}
サギ科	ミゾゴイ			*	*		{倉が岳(永弘) 1974. 7 中宮(茨木)}
	ゴイサギ				*	**	
	ササゴイ				*	*	1979. 7. 17 蛇谷(池田)
	アマサギ				*	*	永弘
ガンカモ科	コサギ				*	**	1980 瀬戸
	アオサギ				*	*	
	オシドリ				(*)		
	マガモ				(*)	*	1977. 11. 25 大日ダム
ワシタカ科	カルガモ			*	**	**	
	コガモ					(*)	永弘
	オナガガモ				(*)	*	
	ハチクマ	*	*	*			
	トビ	*	*	**	**	**	
	オジロワシ				(*)		{1982. 3. 1 市原 1982. 3. 22 中宮(茨木)}
	オオタカ		*	*	*		
	ツミ			*	*	*	
	ハイタカ		*	*	*	*	
	ノスリ		*	*	*	*	
	サシバ			*	*	**	
	クマタカ			*	*	*	
	イヌワシ	*	*	*	*	*	
	チョウゲンボウ	*	*				{1975. 7. 27 四塚山 園部(1976)}

科名	種名	高山帯	亜高山帯	山地帯	山間部	平野部	備考
	ウズラ	(*)					熊野・木村 (1970)
	ヤマドリ		*	**	*	**	
クイナ科	クイナ					(*)	永弘
チドリ科	コチドリ					*	"
	イカルチドリ					*	"
	シロチドリ					*	"
	ムナグロ					(*)	"
シギ科	ダシシギ					(*)	"
	ツルシギ					(*)	"
	クサシギ					(*)	"
	イソシギ				*	*	園部 (1976)、永弘
	チュウシャクシギ					*	
	ヤマシギ				*		永弘
カモメ科	タシギ					(*)	"
	ユリカモメ					(**)	
ハト科	コアジサシ					*	
	キジバト	*	*	**	**	**	
	アオバト			*	*	*	
ホトトギス科	ジュウイチ		*	**	*	*	
	カウコウ		*	**	*	*	
	ツツドリ			**	**	**	
	ホトトギス		*	**	**	**	
フクロウ科	コノハズク			*	*		
	オオコノハズク			*			1977. 6. 19 雄谷
	アオバズク				*	*	
	フクロウ			*	*	*	
ヨタカ科	ヨタカ			*	*	*	
アマツバメ科	ハリオアマツバメ	*	*	*	*	*	
	アマツバメ	**	**	**	*	*	
カワセミ科	ヤマセミ				*	*	
	アカショウビン			*	*	*	
ブッポウソウ科	ブッポウソウ			*	**	**	
キツツキ科	アオゲラ			*	*	*	
	アカゲラ			*	*	*	
	オオアカゲラ			*	*	*	
	コゲラ			*	**	**	
ヤイロチョウ科	ヤイロチョウ				*	*	1980. 6. 8 蛇谷
ヒバリ科	ヒバリ					*	
ツバメ科	ツバメ				**	**	
	コシアカツバメ					**	
	イワツバメ	**	**	**	*	*	手取川ダムで繁殖
セキレイ科	キセキレイ	*	*	**	**	**	室堂、南竜が馬場でも繁殖
	セグロセキレイ			*	*	*	
	ピンズイ	*	**	*		*	
	タヒバリ					(*)	永弘
サンショウクイ科	サンショウクイ		(*)	*	*	*	
ヒヨドリ科	ヒヨドリ		(*)	*	**	(**)	
モズ科	モズ		*	*	*	*	
	アカモズ			*		*	1979. 5. 20 岩間温泉 (加藤)、永弘
レンジャク科	キレンジャク			(*)	*	*	
	ヒレンジャク			(*)	*	*	
カワガラス科	カワガラス		*	*	**	*	
ミソサザイ科	ミソサザイ		**	**	**	*	
イワヒバリ科	イワヒバリ	**	*	*	*	*	
	カヤクグリ	**	**	(*)		*	
ヒタキ科・ツグミ亜科	コマドリ		**	*		*	
	ノゴマリ		*	*	(*)	*	1979. 10. 12 木滑
	コルリ		*	**		*	
	ルリビタキ	*	**	(*)	*	*	

科名	種名	高山帯	亜高山帯	山地帯	山間部	平野部	備考
ヒタキ科・ウグイス科	ジョウビタキ			(*	*	*)	1977. 4. 14 白峰スキー場 1979. 4. 11 白山町
	ノビタキ			(*	*)		
	マミジロ			*			
	トラツグ			*	*		
	クロツグ			*	*		
	アカハラ			*			
	シロハラ			(*	*)		
	マミチャジナイ			(*	*)		
	ツグ		(*	**	**	**	
	ヤブサメ			**	**		
	ウグイス	*	***	***	***	(**)	
	シマセンニュウ			(*			
	オオヨシキリ					*	
	メボソムシクイ		***	*	(*)		
	エゾムシクイ			*			
センダイムシクイ			*	**			
キクイタダキ			*	(*	*)		
セツカ					*		
ヒタキ科・ヒタキ亜科	キビタキ			**	*		
	ムギマキ				(*)		
	オオルリ			**	**		
	サメビタキ		*	*			
	エゾヒタキ			(*)			
ヒタキ科・カササギヒタキ亜科	コサメビタキ			*	*	*	
	サンコウチョウ				*		
	エナガ			*	**	*	
	シジュウカラ		*	*	(*)		
	ヒガラ		**	***	(*)		
ゴジュウカラ科	ヤマガラ			**	**		
	シジュウカラ	*	*	***	***	**	
	ゴジュウカラ		*	**	(*)		
	キバシリ		*				
	メジロ			**	**	*	
ホオジロ科	ホオジロ			**	***	**	
	コジュリ			(*)			
	ホオアカ				(*)		
	ホオアカ				(*)		
	カシラダカ			(*	**		
アトリ科	ノジコ				*		
	アオロジ		*	*			
	アトリ			(*	*)		
	カワヒ				**	**	
	マヒ			(*	*)		
	ハギマシ				(*)		
	ベニマシ			(*	*)		
	ウソ	*	**	(*	*)		
	イカル			*	*		
	シメ					(*)	
ハタオリドリ科	スズメ				***	***	
	ムクドリ					*	
	ムクドリ				**	***	
カラス科	カケ		*	**	**	**	
	オナガ				*	**	
	ホシガラス	**	**	**	(*)	**	
	ハシボソガラス			*	**	***	
	ハシブトガラス				*	**	

たより

今までに白山の鳥について普及誌で取り上げたものは、ライチョウの絶滅に至る過程を推察した数編と、イヌワシに関するものくらいで、その他にはあまりありませんでした。そこで今回は白山の鳥の全体像について取り上げてみました。

6月17日に白山でイヌワシ幼鳥の巣立ちが確認できました。普及誌第8巻第1号で取り上げた、昭和55年5月30日以来白山では2度目の確認です。巣は切り立った岩場の、岩が裂けて出来た深い穴に、木の枝を積んで造られていました。前回にくらべると、幼鳥の動きはあまり活発でなく、また親鳥の巣での滞在時間も少ない点などが異なっていました。

今年は白山が国立公園に指定されて20周年をむかえました。センターではこれを機に、白山の保護と利用をテーマとして、白峰村においてシンポジウムを開きました。京都府立大学学長の四手井綱英氏の「21世紀への山岳国立公園」と題する基調講演の後、金沢大学理学部教授紘野義夫氏の司会で、白峰村長織田英二氏、石川県自然保護協会長木村久吉氏、白山観光協会事務局長北村政次氏の各パネラーと、一般参加者約200名で討論会が開かれました。地元白峰村など白山麓を始めとして、金沢など都市部からも多くの参加者があり、白山の保護と利用について活発な意見が出されました。内容については、普及誌の増刊号として発行しますのでご覧下さい。

次にセンターの展示室の、主に人文コーナーの展示内容が今年変わります。白山麓の昭和30年頃と現在の生活を比較して、その移り変わりを知っていただくために、白峰村の道路、出作り、砂防堰提などを例にした電照パネルを設けます。また焼畑や動植物の利用について、新しくパネルを作成します。どうぞご期待下さい。(上馬)

目 次

特集 白山の鳥類

表紙 イワヒバリ	上馬 康生	1
白山の鳥たち	中村 正博	2
環境別にみた白山の鳥類	上馬 康生	4
クロジの営巣—白山山系での初の繁殖確認	池田善英・上馬康生	7
白山探鳥記—秋の中宮道に行く	柴田 文子	10
白山地域鳥類目録	上馬 康生	13
たより		16

はくさん 第10巻 第1号(通巻42号)

発行日 1982年7月20日
発行所 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村中宮
〒920-24 Tel 076196-7111
印刷所 株式会社 橋本 確文堂